

〔秋里隨筆〕下 宰府奇梅

抑宰府天満神とあがめ奉るは、菅原道眞卿の靈をまつる事は、衆人よくしる所にして、利生あらたにましくければ、近國はさらなり、遠つくにより歩をはこびること、年々歳々とこしなへなり、然に明和の頃、東社屋根葺更かのさたにおよびけるが、神木の楓樹繁茂して、二三枝本社の破風に垂けり、よつて枝をおろさずしては、葺かゆる事かたかるべしと評定し、其朝社人枝を伐らすべしと出來りけるに、不思議なるかな、かの破風にたれたる枝悉くふりかはりて、葺更のさはりを除けるとなん、是まさに菅神愛樹を惜給ふ所ならむと、諸人奇異のおもひをなしけるとかや、又當社より梅守と號白かづけき絹をもてかの梅を封じ、朱をもて表に天満神の文字を捺るし出す事なり、さればそのとしぐ、此守を受る諸人の數に應じ、實をむすぶとかや、これらも神の示し玉ふ所ならずや、

〔謡曲〕老松

フキ聞及びたるとび梅とは何れの木を申候ぞ、レ荒事も愚や我等は唯、紅梅殿と社あがめ申候ヘ、ロキ實々紅梅殿共申べきぞや、忝くも御詠歌により、今神木と成給へば、あがめても猶あきたらず社候ヘ、

〔拾玉藻〕一 飛梅○中略

元來菅家ノ思ヒ人三人有リ、一人ヲバ櫻戸殿ト云、一人ヲバ紅梅殿ト云、一人ヲバ老松殿トゾ申シタリ、○中略今安樂寺ニアル所ノ飛梅ト云ハ、紅梅殿ノ御墓ノシルシノ樹ナリト云櫻戸御前ハ御臺所ニシテ、紅梅殿老松殿ハ妾ナリト云、紅梅殿ノ屋敷跡ハ、今ノ西洞院高辻ニテ、今菅大臣ト云神社ノ鄰リノ趾ナリト云フ、

〔玉勝間〕九 梅はとぶといふ歌